

戦場の メリークリスマス

映画文学人生論

原作：ローレンス・ヴァン・デル・ポスト
監督：大島渚 (1983年) 脚本：大島渚
出演：セリアズ D.ボウイ P.メイヤーズバーグ
ローレンス トム・コンティ 撮影：杉村博章
ヨノイ大尉 坂本龍一 音楽：坂本龍一
ハラ軍曹 ビートたけし

メリークリスマス、ミスター・ローレンス

大島渚監督の映画『戦場のメリークリスマス』を観て特に強く印象に残った二つの場面がある。一つは、死んだ日本兵の葬儀で、ハラ軍曹（ビートたけし）が僧侶になりすまして読経をしているとき、捕虜のローレンスが立ち上がって、「おまえらの汚れた神のせい、私はウソをつかなければならないのか。私はおまえらの神を呪う」と言い、祭壇のローソクや花を手で払い倒した場面。

もう一つは、戦争が日本の敗北で終わり、こんどはハラ軍曹が捕虜になり、死刑が執行されることになった。その前に面会にいくと、「メリークリスマス、ミスターローレンス」と軍曹が言ったラストの場面だ。捕虜収容所で散々殴りつけ、ひどい目にあわせ続けた相手に対して今さら、「ミスター」をつけて呼ぶとはいったいどんな神経をしているのか。そのような節操のない変わり身の早さが日本人の特質なのだろうか。

この二つの場面が伝えるものは、民族の深層心理からみて、大東亜戦争が宗教戦争だったというメッセージだろう。映画からはキリスト教国家と仏教国家との戦争でキリスト教国家が勝利したという印象を受けるが、「おまえらの汚れた神」とは仏をさしているのだろうか。

そこで、ローレンス・ヴァン・デル・ポストの原作『影の獄にて』（由良君美・富山太佳夫訳）を読んでみた。作者はオランダ系南アフリカ人で

戦場の メリークリスマス

映画文学人生論



で第二次世界大戦ではイギリス陸軍に志願した。実際にゲリラ部隊を指揮中に日本軍によって捕らえられ、捕虜収容所で約三年間過ごしている。

原作を読むと、「おまえらの汚れた神・・・」というローレンスのセリフは見あたらない。その代わり、ハラ軍曹について、「彼は個人でもなければ、ほんとうの意味での人間でもない・・・ハラは生きた神話なんだ・・・。二千六百年にわたるアマテラスという太陽の女神の支配の周期が、ハラの内面で燃えさかっていることを忘れてはいけない」と言っている。

これから判断すると、ローレンスが戦って、辛酸をなめながらも最後に勝った相手は仏の信者ではなく、神道の神アマテラスの子孫ということになる。大島渚監督の映画からは原作者のその趣旨のメッセージが正確に伝わらない。

この映画が戦争の断面について描いた新しい切り口として話題になったのは。収容所長のヨノイ大尉（坂本龍一）とゲリラ隊を指揮して、捕虜になったセリアズ大佐とのホモセクシュアル的な関係だ。ホモでない観客にはあまり面白くないが、原作によれば、日本人は美には眼が高く、セリアズのような美男子には想像力がかきたたれるという。私にはアマテラスがハラ軍曹の内面で燃えさかっているという見方の方が面白い。

神々も御照覧あれクリスマス